



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「北海道大学の歴史」を開講して
Author(s)	近藤, 健一郎
Citation	北海道大学大学文書館年報, 3, 92-99
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43371
Type	other
File Information	3_92-99.pdf



< 研究ノート >

「北海道大学の歴史」を開講して

近藤 健一郎

はじめに

2007年度1学期、火曜日1限に、全学教育科目・主題別科目(歴史の視座)として、「北海道大学の歴史」を開講した¹⁾。いわゆる一般教養科目の一つである。これまでも「北海道大学の人と学問」など北海道大学に関連する全学教育科目は開講されてきているが、大学の歴史を題目に掲げた全学教育科目は初めてである。本稿ではこの初めての試みを大学授業記録として残すとともに、来2008年度以降も継続的にこの科目を開講していく際の課題を検討することを目的としている。

なお、担当責任教員は近藤健一郎(教育学研究院・大学文書館運営委員会委員)であったが、加えて池上重康(工学研究科・大学文書館兼務教員)、井上高聡(大学文書館員)、逸見勝亮(副学長・大学文書館長)、山本美穂子(大学文書館員)の4名がそれぞれ2回ずつ授業を担当した。受講登録者は159名であり、学年別では1年生49名、2年生107名、3年生3名、学部別では工学部75名のほか、農学部18名から歯学部2名まで獣医学部と薬学部を除くすべての学部にわたっていた。

1. 科目開講の意図

自らの大学の歴史をいわゆる一般教育科目の一つとして開講することは、現在では多くの大学でなされていることと思われる。なかには九州大学などのように、テキストを公開している場合もある²⁾。北海道大学では、これまで自らの大学史を主題とする授業科目こそ開講されていなかったが、それでも、これまでに『北大百年史』(通説、部局史、札幌農学校史料、1980～1982年)や『北大百二十五年史』(通説編、論文・資料編、2003年)などの大学史編纂の蓄積をもち、また北海道大学に関する文書・資料を収集し整理・保存・調査研究等を行う大学文書館という組織を2005年から設けていた。私は、2006年度の年度途中に日本教育史の担当として北大に赴任し、それらの蓄積や組織に依拠しながら、自身の教育と研究の幅を広げたいと考えた。そして、大学文書館の全面的な支援を受けることにより、2007年度前期の開講に至った。

私はこの科目を開講することによる受講者への教育的効果として、北海道大学で学ぶ自分自身を歴史的に捉えることをめざした。ただし、このことは北大の環境等の中に身を置

く自分の意味あるいは位置を見出そうとするものであって、決して「北大万歳！」を唱えることを目的とするものでないことを断っておきたい（この点は第1回の授業においても強調した）。シラバスの「授業の目標」には、次のように記した。

私たちが学んでいる北海道大学の足跡を、史料に基づき、札幌農学校時代から辿ることにより、自らの「つながり」を時間の流れのなかで捉える。このことを通じて、北海道大学での学習や生活への意欲形成の一助としたい。

日常の大学生活において、サークルやクラス、学部・学科などでの上級生・下級生という関係も含む友人関係や、授業などでの教員と学生との関係など、同時期を過ごす他者との「つながり」を感じることは多いだろう。この授業がめざしたものは、別の「つながり」、いうなれば「学びの場」としての過去からの、そして未来への継続性である。シラバスの「到達目標」には、先行研究の摂取と歴史的な思考に重点をおいて、以下の4項目を示した。

- 1) 北海道大学がこれまで行ってきた『北大百年史』等の大学史編纂があることを知り、それらから学ぶことが多いことを理解する。
- 2) これまでの大学史が引用してきた史料のいくつかを読み、記述を確認するとともに、未解明の論点もあることを理解する。
- 3) 普段、当然のことのように感じていることも、実は歴史的に形成されてきていることであることを理解する。
- 4) 北海道大学の歴史は、広く政治、経済、社会、科学等の動きと連動していることを理解する。

2. 科目開講の実際

(1) テキストと授業内容

授業のテキストとして指定した図書は、北海道大学125年史編集室編『北大の125年』（2001年）である。同書を指定したのは、北大史を俯瞰することができる書籍であるばかりでなく、同書の「あとがき」に、「北大が創基125年を迎える2001年から数年間にわたって新入生に配布するという考えのもと、写真や図表を多用した読みやすい刊行物とすることを方針として編集した」と記しているように、新入生を主な対象として編纂されており、入学当初1・2年生の授業テキストにふさわしいと判断したことによる。そのほか、授業を行うにあたって、各回の授業担当者がレジメのほか、史料や論文をプリントとして配布した。

授業内容の構成は、『北大の125年』の構成³⁾を参考にしつつも、実際の授業では授業

担当者が何かに重点を置いた講義をすることになるため、シラバスの「授業計画」においては北大の沿革を基本とする区分にとどめて⁴⁾、以下のように示した。

1. ガイダンス (授業のねらい等)
2. 札幌農学校
3. 東北帝国大学農科大学
4. 北海道帝国大学
5. 戦争と北大
6. 北大のキャンパス
7. 新制北海道大学
8. 最近の北大

授業の進め方として、毎回、出席をとることを兼ねて、授業への感想や質問等を記入してもらい、次回以降、口頭であるいはプリントで主なものへの返答を行った。

以下、第1講から順にそれぞれの授業において取り上げた内容とそれへの学生からの質問のいくつかを紹介していくこととする。

①第1講 「ガイダンス」(4月10日、近藤)

担当者の自己紹介ののち、授業の目標、講義日程案、テキスト、成績評価、授業の進め方などをシラバスに基づいて話した。

②第2講 「これまでの北海道大学史編纂について——歴史的資料のはなし——」

(4月17日、井上)

大学文書館が所蔵する受講ノート、学生のレポート(実習報文)を具体的に示し、それらが遺族や学科などの保管により残ってきたこと、それらを研究者が意味あるものとして取り上げたときに資料となることを論じたのち、これまでの北海道大学史の編纂書について及びその過程で用いられた大学関係資料の収集・整理・保存を現在では大学文書館が行っていることを講義した。受講者からは、歴史資料には偶然残った場合が多いこと、自分のノートも歴史資料になるかもしれないことなどの感想が寄せられた。

③第3講 「札幌農学校1——創設とお雇い外国人——」(4月24日、井上)

東京に設けられた開拓使仮学校、札幌農学校開校準備に触れたのち、「札幌農学校諸規則」(1876年9月)を示して、札幌農学校が北海道「開拓」に従事する者の養成を目的とすること、卒業生には「大学及第ノ免状」(学士)を授与すること、入学資格として英語の読み書き話す能力を求めたことを指摘した。そして札幌農学校の外国人教師と第1・2期生の一覧を掲げて、教育機関としての出発を論じた。受講者からは、外国人教師の業績

や、なぜ英語による講義がなされたかなどの質問が出された。

④第4講 「札幌農学校2 —— 第14期生平塚直治の学業史 ——」（5月8日、山本）

大学文書館に受講ノートが寄贈されている平塚直治（札幌農学校を1896年に卒業した第14期生）に焦点をあて、彼の札幌農学校で受講した教科や担当教員などの詳細、遊戯会や植物標本採集などの課外活動からなる学業生活について、さらに彼の誕生、小学校入学から札幌農学校合格に至る入学前及び卒業後の経歴についても具体的に論じた⁵⁾。受講者からは平塚以外についてもこれほど詳細な記録が残っているのか、学士の人数についてなどの質問が出された。

⑤第5講及び第6講 「東北帝国大学農科大学1・2 —— 札幌農学校の再編・昇格と佐藤昌介 ——」（5月15日・5月22日、逸見）

資料として「札幌農学校の再編・昇格と佐藤昌介」（『北海道大学大学文書館年報』第2号、2007年）の全文を配布し、それに基づき講義を行った。札幌農学校の第1期生であり、札幌農学校教授・校長、そして東北帝国大学農科大学長、北海道帝国大学総長となる佐藤昌介が、1882年以降続く札幌農学校の縮小廃止案に対峙して再編拡大に奔走する過程、とくに岩手県出身で同郷の原敬と佐藤昌介の濃密な交流を踏まえながら、帝国大学昇格に不可欠であった古河鉱業寄附金の献納先を原敬が主導した事実を論じた。受講者からは、佐藤昌介という人物を初めて知ったということのほか、講義の導入に用いた佐藤が岩手県出身であることが重要なことなのか、原敬の読み方などの質問が出された。

⑥第7講 「北海道帝国大学1 —— 北海道帝国大学の研究・教育機関 ——」

（5月29日、近藤）

1918年に独立して以降の北海道帝国大学には、農学部、医学部などの学部のほかに、大学予科、実科、専門部が付設されており、それらの入学資格などを比較検討した。なかでも北海道帝国大学附属水産専門部規則（1919年）の検討に時間を割き、北海道帝国大学には「高等教育ヲ授クル」専門教育の系統も存在していたことを論じた。受講者からは、専門部は学部よりも劣っていたのかという質問や、水産学部の沿革略史だけでなく自分の所属する学部の歴史も講義してほしいといった要望が出された。

⑦第8講 「北海道帝国大学2 —— 女性の入学 ——」（6月5日、山本）

1918年に北海道帝国大学農科大学に全科選科生として入学した加藤セチが北大最初の女子学生であり、女性の学部学生の嚆矢は1930年、理学部に入学した吉村フジである。理学部規程（1930年）によって理学部の入学志願者に欠員ある場合は女性も有資格者であったこと、その制度が採られた背景及び学生募集の実態を論じた。そして、1930～45年度に理学部・農学部に入学者が25名であったことを示した⁶⁾。受講者からは、理学部・農

学部にしかな女性が入学しなかった理由や、女性教員についてなどの質問が出された。

⑧第9講 「戦争と北海道帝国大学——学徒出陣——」(6月12日、近藤)

徴兵制度においてそれまで学生に与えられていた徴集延期等の特権が縮小廃止されていく過程を制度的に講じたうえで、北海道帝国大学では、1943年以降、医・工・理学部学生は入営延期措置がとられたが、農学部の一部の学科の学生はその措置が適用されず、農学部学生の3割にあたる134名が徴集されたことを指摘した。また軍事と関連づけながら研究施設を拡充していくなどの科学動員についても言及した。受講者からは、学生に与えられていた特権の意味や、学徒出陣に伴う進路選択の変化などの質問が出された。

⑨第10講 「北大のキャンパス1——札幌キャンパスの建物——」(6月19日、池上)及び
第11講 「北大のキャンパス2——北海道大学の歴史的建築——」(6月26日、池上)

受講者から予め出されていた質問、なぜメインストリートはあんなに長いのか、北大に残る最も古い建物は何かなどに答えながら、札幌農学校創設期から現在に至るまでの北海道大学札幌キャンパスの成り立ちについて講じた。創設当初の札幌農学校は現在地ではなく現在の時計台のあたり(北一条キャンパス)にあったこと、現在のキャンパス形成にサクシュコトニ川が自然条件としてあったこと、帝国大学への昇格とくに工学部新築によりメインストリートが北へ延びキャンパス構成軸となったこと、1960年代に建物の新築増改築移設がなされ旧工学部校舎白亜館などの建築物も撤去されたことなど、多岐にわたる論点を、地図、写真、映像、復元モデルなどを多用して視覚的にも講じた⁷⁾。

⑩第12講 「新制北海道大学——北大方式の教養課程——」(7月3日、近藤)及び
第13講 「最近の北海道大学——学部一貫教育の開始——」(7月10日、近藤)

新制北海道大学の教育課程において、一般教養科目が大学の教育課程に位置づいており、その運営では学生の文類・理類・水産学部という大枠での入学であること、2年間教養部に所属したのち学部に進学すること、教養課程担当教官も各学部にも所属することを柱とする「北大方式」がとられたことを論じた。続いて、全学教育の最近の変化について入学方式と関連づけて、共通1次試験導入と同時に1979年度から文Ⅰ～Ⅲ系などやや細分化した学生募集を実施したことを経て、1995年度から現在の学部一貫教育を行っていることを講じた。受講者からは、現在受けている全学教育についてのほか、教養科目を大学に位置づける長短などについて質問が出された。

(2) 成績評価・レポートについて

シラバスの「成績評価の基準と方法」において、「レポートと出席により総合的に評価する」と示した。そのレポート課題は、授業半ばの第9講(6月12日)において、「各自が北海道大学の歴史に関連して、興味を持ったこと、調べてみたいと思った事項について、

調べ、記述すること」とし、分量はレポート用紙2～3枚を原則とした。留意事項として、授業をそのままの姿のものである必要はないこと、レポート題目を各自が設定することを指示した。出席については、毎回授業終了時に提出する質問・感想等の内容により出席している場合であっても軽重をつけた。

受講者が提出したレポート課題は多種多様であったが、講義で取りあげた内容について論じたものばかりでなく、自分自身に関連するなど北大史のテーマを見つけて調べたものも多かった⁸⁾。前者のテーマ例は、「クラーク博士」「札幌農学校と時計台」「札幌農学校から農科大学への再編」「北海道大学の女性の立場」「学徒出陣」「教養部の変化」などである。後者は、自身の所属する学部や課外活動への関心から、「工学部の歴史」「七大戦の歴史とその意義」「恵迪寮」などのテーマを取りあげており、そのほか北大関係者の著名人である新渡戸稲造、有島武郎、内村鑑三、宮部金吾などの活動や業績について調べたものも見られた。多くのレポートは当然とはいえ文献にあたって作成されており、いくつもの力作があった。本年報には、それらのうちから、自らの課外活動に基づく関心から調査を行った吉國秀平さん（農学部2年生）のレポートを全文掲げたので、ご参照いただきたい。

おわりに——講義を終えて——

上述のように、『北大百年史』『北大百二十五年史』等これまで編纂されてきた北海道大学史、さらにその後発展した研究成果に基づいて、授業内容を構成することができた。その点において、来年度以降の授業内容の深まりと広がり、研究の進展に対応することは当然である。そのことを前提として、授業科目「北海道大学の歴史」を全学教育科目として学生の関心に応えられるようにするために、どのような授業内容を必要と考えるか、受講者のレポート及び毎回の質問等を参考にしながら⁹⁾、述べてむすびとしたい。

「学びの場」として北海道大学の歴史をたどろうとする時、七大戦や恵迪寮について取り上げたレポートが少なくなかったことの意味は大きいと考える。その意味とは、教育課程に限定されない学生生活への関心の大きさを示している点にある。私が担当した新制北海道大学について、教養課程を中心とした授業内容に限定してしまったことは反省点である。授業全体としてみても、課外活動への言及は、山本が担当した第4講において平塚直治の学業生活の一環として遊戯会や植物標本採集などを講じたにとどまる。テキスト『北大の125年』で記述されながら、授業で全く触れなかった課外活動の一例として文武会がある。学生生活に迫れるような授業内容にしていくことは必要であろう。

関連して、受講者にとって北大で学びまた教えた人々への関心も大きかったように思える。今回の授業でも、クラークをはじめとする外国人教師たち、佐藤昌介、平塚直治、北海道帝国大学に入学した女性たちなどを取り上げることができた。なかでも、女性たちについては、調査中の内容も論じていた。そのような芽を伸ばしながら、学んだ人や教えた

人については、これからも発展的に授業内容としていくべきであろう。

他方、教育課程について、部局史を取り上げたレポートがとても多かったことの検討も欠かせない。『北大百年史』『北大百二十五年史』が部局史を大きく取り扱っており、レポート作成時に基本文献の入手が容易であったであろうことはあるにしても、現在の学部一貫教育のもとで受講者は入学当初から各学部にも所属していることを考慮すれば、自らの学部の歴史に関心を寄せることはごく自然なことと思われる。この授業では、専門教育の系について同時に北海道大学のキャンパスが函館にもあることの理解のために水産専門部・水産学部の歴史を取り上げたり、女性の入学について考察するために理学部の入学制度を論じたりした。全学教育科目という観点からすると、単純に部局史を追加するのではなく、大学の拡大過程に部局史をも位置づけるような授業内容とすることがよいであろうか。

最後に、授業内容構成の改善点として、ある問題について通史的に理解できるような工夫をすることがあげられる。今回は、キャンパス史を除いて、北大史の沿革を基本に授業内容を組んだけれども、例えば新制北海道大学の講義で教養課程に力点を置くならば、北海道帝国大学の教育機関について論じる際、予科にもう少し重みを持たせることは可能であっただろう。今後、人物、教育課程、課外活動などの問題史を沿革と重ねあわせて授業を構成することを試みたい。

毎回熱心に感想や質問を書িয়েくれたり、力作のレポートを作成してくれたりした受講者に応えられるように、授業内容の構成を再検討するとともに、調査研究を進めていくことをめざして、本稿を終える。

【注】

- 1) 北海道大学の全学教育科目の主題別科目では「歴史の視座」のように大括りの科目名が定められるのみであり、講義題目を授業担当教員が毎年度定めることとなっている。
- 2) 九州大学の大学史を主題とする総合科目「大学とはなにか」のテキストは、新谷恭明・折田悦郎編『大学とはなにか——九州大学に学ぶ人々へ』（海鳥社、2002年）である。同書5頁及び九州大学ホームページで公開されている2007年度前期シラバスによる。
- 3) 『北大の125年』の章構成は以下の通り。Ⅰ 北大の黎明＝札幌農学校、Ⅱ 農学校から農科大学へ、Ⅲ 総合大学への道、Ⅳ 戦争と北大、Ⅴ 北大における戦後改革、Ⅵ 拡充する北大、Ⅶ 21世紀を展望して、むすびにかえて。
- 4) 北大の沿革の略は以下の通り。1876年札幌農学校開校、1907年東北帝国大学農科大学に昇格、1918年北海道帝国大学として独立、1947年に大学名を北海道大学と改め、1949年に新制北海道大学として再出発し、2004年の国立大学法人化を経て現在に至っている。
- 5) この授業内容は、山本美穂子「平塚直治受講ノート（西信子・西安信氏寄贈）をめぐって——札幌農学校第14期生の学業史——」（『北海道大学大学文書館年報』第2号、2007年）に基づいている。
- 6) この授業内容は、山本美穂子「北海道帝国大学理学部における女性の入学」（『北海道大学大学文書館年報』第1号、2006年）に基づいている。
- 7) この授業内容は、『北大百二十五年史』通説編（2003年）や『写真集北大125年』（2001年）など、

池上の一連の研究成果に基づいている。

- 8) 5名以上がレポートで取り上げたテーマを大まかに区分して列挙すると、以下の通り。クラーク及び外国人教師（24名）、学部・学科・教養部の部局史（24名）、キャンパス・建物等（14名）、札幌農学校（10名）、戦争と北大（9名）、大学紛争（8名）、新渡戸稲造（6名）、佐藤昌介（5名）、北大の女性（5名）。
- 9) この科目では、全学的な授業評価アンケートを最終講で実施したが、脱稿時点においてまだ結果は集計されていない。

（こんどう けんいちろう／北海道大学大学院教育学研究院准教授）